

當座探題：文苑

著者	稼堂，桃江，錦山，眞榮，孝，蘆月，破村，基紀， 鉄州，芝峯
雑誌名	龍南會雜誌
巻	6 9
ページ	4 7 - 4 9
発行年	1898-12-24
その他の言語のタイトル	当座探題：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5192

かきしめては家つとせんに賤か屋の垣根にさける菊の一本
 賤かやのまかきの菊の花もたゞ今日の盛をそへんどや咲く
 法のかなる浮世の外の賤家をひどりしめたる菊の花かな
 まつかやの垣根の菊もかをるなり君か惠の露のあまねく
 すがかては誰にか見よまつか家の垣根に向ふ白菊の花
 人遠き庭に向へる白菊やこの世の外の色は見えたる
 賤男かすつるかきぬのちりひちを色にかくせり白菊の花

郭外冬眺(全)

託麻野の一面あすきさちかかれて日影さひしき冬はきにけり
 飛鳥のねくらにかえる音もたむて眺さひまき冬の夕くれ
 たゞに守るかき法の外に人もなま山家も今や冬は知るらむ
 霜かれし杜の梢水日は落て鳥の音さひま託麻野の原
 吹さすはふ風に散行く木蔭の葉の軒端にふかき冬の夕くれ
 木枯の風に草木もかれはてゝ人めまれなる冬の夕くれ
 木枯の吹さゆゝのらを來て見ればなへてふするの床どこも見れ

當座探題

想の漣のさか憂喜俄人々さかすまふさかすまふ風のまじり

文苑

椽堂先生

四十七

眞榮 孝州 鉄 基紀 寄熊 蘆月 奇熊 鉄州 蘆月 基紀 破村 孝江 桃江

秋の野のをみ恋へしにならひそよふすもなひくも風のまに〜

松間紅葉

木枯のふくをまつまの夕紅葉散るぬ先よりをまされにけり

本條の風斗草山居述懐

ぬらちには訪ふ人かな落葉ふくぬるまはしき山下の庵

在ひとさけ柴の庵の青のふらくる人かなし片山の里

式と山居の深山曉明

かたききと夢も結はぬ深山路の袖にもすむか有明の月

筋根路やさゆる霜夜に夢さめて有明かたの月を見る哉

世路如夢

夢ぬれやさのふの備も今日の瀬どかはりにかはるけふの世の中

人面も鏡も紅葉如錦

袖木なる賤靴もかみな秋のみは紅葉の錦きぬ時そなき

夕のかけぬれも出て歸る蛋の舟はやくもさすや夕月の影

鏡の面水大和のさき花映水

氷の面水大和のさき花映水

桃江

錦山

眞榮

孝

蘆明

孝村

辞家見月幾回圓

故郷を立いてしより幾度か月の姿のまどかなる見る
望月の影見る毎に思ふかな故郷出て幾日經にけむ
月影も共に流れて秋の夜のなかつきせぬ水の面かな
不知秋思在誰家

基 紀
鉄 州
芝 峯

夜もすがら誰れ秋風を身にまめて衣打つらむ玉川の里
誰家に砧うつらむさらてたにかなしきものを秋の夜なく
さなきたに淋えきものを雁の聲さくにえたへぬ獨寐の床
山松の音にかよひて聞ゆなり月にすみゆく笛の二聲
秋の夜の光くまなき月の夜は笛の聲さへすみて聞ゆる

鉄 州

桃 江
鉄 州

雜 立 歌

いたつらにふけぬ身をは秋の夜の月にうつしてかこちぬる哉

江 陽